



巻頭言

－「火定（かじょう）」を読んで－

代表理事 三戸 秀樹

1. コロナに触れた会報と「火定」

Vol.1(3)の巻頭言の「“寄り添い”復活で人々は気づくのか？」において、コロナ禍による孤独問題がクローズアップすることに触れた。さらに、Vol.2(2)の巻頭言の「孤独の問題とコロナ禍」では、“寄り添い”こそがコロナ禍における重要なポイントであることを指摘し、比較行動学的知見も引用した。そして前号 Vol.2(4)では、公開講座『現代人の孤独とは』を全2回(1月22日、1月29日)にわたって開催をして、その全容のまとめを記した。コロナ禍における行動制限、すなわち孤独化影響は、①戦後のなか進展してきた人々の“主人公化心理”と②“家庭の外化”現象の過度な進み具合によって、一層の欲求が充足出来ない不満(フラストレーション)が高まる。そしてややもすると、フラストレーションから噴出しやすい“攻撃的行動”が出現し、また表出されやすい構造を有することになる。

さて、澤田瞳子(1977～)が書いた「火定」という小説は、コロナ禍にあってもあまり読まれていないのではないだろうか。なぜなら、この本の古本価格が上がっていないからだ。かたやアルベール・カミュが1947年に書いた「ペスト」は、このコロナ発生の初期に、一気に中古市場の価格が高騰した。なお火定は、2020年の第158回の直木賞にノミネートされた作品であるが、澤田は翌2021年に、別作品「星落ちて、なお」で直木賞を受賞した。かなりの実力ある作家だと思う。

2. 天然痘ウイルス

筆者は、理学部物理学科卒業後すぐに、心理学の学部編入学をして卒業、そして大学院の5年間を修めた。しかし時期尚早。全国、心理学部はどこにもない状況。心理学科もほとんどない時代であった。折しも出来たばかりの大阪大学・人間科学部・行動生理学研究室と、新設の近畿大学・医学部・公衆衛生学教室から同時オファーが来た。しかし博士課程を修了する同期生で、別の研究室にN君という就職先の無い人がいた。筆者は、宝塚の自宅から30分以内で行ける阪大・人間科学部へ、当研究室における研究内容も自身の研究的関心によく合っているので行くことにして、N君へ近大医学部を紹介をした。すると、医学部からは、「文学部卒の人は採用致しません」の返事が返ってきた。悩んだけど、筆者が大阪狭山市に創られた新設・医学部へ赴任し、行き先のないN君を大阪大学を紹介することですべてうまく収まると考えた。母への報告では、「あなたがそれで良いのであれば良い」と母に言われたことを憶えている。結局、宝塚の自宅から30分以内で行ける阪大・人間科学部を彼へ紹介して、大阪狭山の近くに下宿して医学部勤務をすることにした。1970年4月からの公衆衛生学教室では、心理学の研究ばかりする訳にはゆかない。結局、公衆衛生学の勉強・研究もおおいにすることになった。

筆者の腕の上の方に天然痘の予防接種のあとが残っている。そして小学校時代には、疱瘡とか痘瘡と言われる言葉をよく聞いたが、疱瘡や痘瘡とは天然痘のことである。中学校時代の社会科の先生は、顔の全面が凸凹だらけで、いわゆる痘痕(=あばた)の顔をしておられ、天然

痘にかかられた跡を残す特徴的な顔だったことを憶えている。23 年間の公衆衛生学教室勤務の初期、天然痘が地球上から撲滅され、1980 年 5 月 8 日の WHO “撲滅宣言” に接することとなった。天然痘は、わが国の法定伝染病でもあったが、1955 年の患者を最後に、わが国からは消滅した。今回のコロナ禍がはじまった初期（パンデミックより前）、MHC の代表理事として、有する公衆衛生学的専門性から「MHC としてのコロナ対応」について段階を追いながら明確にして行った。しかしながら、当時の事務責任者の反応・発言などは素人であると割り引いても、粗雑なものでしかなかった。

医学部の公衆衛生学講義では、昔の道路普請のごとき「役」を人々へ課して、その労働集団から集団的に疫病が発生した。この歴史から、「役」と「病」を合わせてヤマイダシの「疫」という表記文字を作ったことを教えた。

現状のコロナ禍は、なかなか終息しなくて、行動が大きく制約されている。これは、奈良時代の聖武天皇・光明皇后時代のごとき有り様である。当時の奈良時代に天然痘流行が猛威をふるい、政府高官たちもことごとく死ぬ有り様だった。さらに火災や、大地震も加わり、聖武天皇は結局、短い 5 年の間に都の平城京から恭仁京、難波宮、紫香楽宮と遷都し、最後の 4 回目は結局、元の平城京へ戻った。藤原不比等の 4 人の息子は、みな天然痘で亡くなった。聖武天皇は、この災厄対応から仏教へ深く帰依し、国分寺を建て、東大寺を建造し、大仏殿をつくった。頻度高い遷都の理由について、いろいろと言われているが、やはり疫病の大流行は最も大きな理由であったのではないだろうか…。なお当時の政府は、疫病発生状況報告を公式令で定めており、かなり詳細な記録が残された。最初のもは 735 年、太宰府管内、すなわち北九州が最初の患者発生地とされた。一説には遣唐使を発生源とする説もあるが、天然痘ウィルスは 738 年 1 月までで、3 年ほどで終息した。ここにおける状況を舞台にして、澤田の「火定」は書かれている。コロナ禍もあといましばらくの辛坊だろう。

3. 明治時代のコレラ

広島県府中市は最近 2021 年に、DVD 映画『名医死す～感染症と闘った藤野昌言物語～』を作成したことを紹介しておこう。この短い映画は、ネット上で無料閲覧が可能だ。藤野昌言(1832～1879)は、明治時代の 1879 (明治 12 年) に府中でコレラが猛威をふるった時、コロナ治療のために人々に献身的に医療行為をした人で、自らコロナで 48 歳で亡くなった。貧しく困窮していた人からの治療費はとらずに、生活の面倒も見ていたといわれ、「医は仁術なり」を言葉通りに実行した。地域の人々は、彼の死後、神様として神社にまつり、藤野神社と称し、140 年余り経った今日も、命日 10 月 6 日に藤野祭が行われている。神社にある頌徳の碑文『藤野国手祠堂記』には、「医術は本来今日のためにあるのだ、我が義のために身を虎口におく。安逸を好み劣をいとうて座視することが出来ようか。」という藤野昌言の発言が記されている。なお国手とは、名医は国の病をも治すという古語から医師に対する尊称である。なお、藤野昌言は三戸秀樹の祖父(宮野容吉)の祖父にあたる人＝玄祖父で、現・民法が定める「六等親内の親族」規定の範囲にはいる人でもある。映画の最後に出て来る藤野茂之さんは、小生の従兄である。なぜなら、茂之兄さんの母が伯母(父・三戸左内の姉)でもあるからだ。茂之さんの父・藤野守一が軍医として南方へ出かけていた期間、およびその後、藤野守一・一家は三戸宅で一緒に生活された。しがたって、茂之兄さんは通常の従兄弟以上に近い感じがする。

昌言の弟・藤野卓彌(注：のちに養子となり、内海姓に変わった)は、緒方洪庵先生の適塾出身であった。適塾の歴史を調べておられた藤野恒三郎先生(元・阪大医学部付属微生物研究所・教授、腸炎ピブリオ菌の発見者)から、近畿大学の医学部時代、研究室へ直接電話があって、「昌言さんも適塾出身者ではないのですか？」と尋ねられたことがあった。その記録は、「適塾門下生調査資料 第Ⅱ集」(藤野恒三郎・梅溪昇編、大阪大学刊、1973)に残されている。

(備考) 火定とは、仏教修行者が火中に身を投じて死ぬこと。火中で入定(にゅうじょう)す

ること。

産業安全シリーズ講座2021（まとめ） ー産業安全が分かる心理臨床家の育成のためにー

三戸 秀樹

2021 年度に開講した初めての安全系講座であるので、概要をここに報告しておきたい。その内容は、年度ごとに変わると思うが、また開催回数においても増減があると思う。メンタルダウンしたクライアントに対して、クライアントの認知構造や行動の変容を期待しながらカウンセリング実施をしていることは多い。他方、労働現場では、労働者の認知構造や行動変容を期待しながら、安全行動へシフトするよう安全カウンセリングや安全指導を実施している。

産業現場の実態が見えてくると、見過ごすことが出来ない重要な課題があることに気づくだろう。労働事故死亡数に対して、メンタル系の災害死亡数は、労働事故死亡が、メンタル系災害死亡数の約12倍の多さであることに気づくはずだ。産業系における労働者への心理指導は、メンタル系に留まらないで、安全系への関与をもっと持つべきだ。これまでの不関与は、①気づいていなかった、②安全や災害・事故に関する基礎知識を持っていない、以上2点の指摘からの開講と相成った。

計4回シリーズの第3回目を外部講師へお願いを致していました。しかし、予定講師が学部長をされておられる関係から、急遽の予定がその日と重複し、講師変更の止むなきに至りました。講師経費のこともあり、代表理事によるピンチヒッターと相成って、4回すべてが代表理事の担当となりました。

1. 事故発生の過去歴史（8月7日(土)）

これまでの労働災害の過去歴史について概観した。世界的にも大きな事故の多くがわが国で起こっていたことが再認識出来る。その一つは、三池の三川炭鉱じん爆発事故による58人の死者を出したものである。もちろん、この事故による一酸化中毒による後遺症患者は、現在でも多く残されている。当患者のために設立された病院は近年閉院をしたが、患者はまだ残されている。

日本国有鉄道（国鉄）が起こした列車事故、それは国鉄の運輸労働者の働きによる事故だとみる。国鉄戦後五大大事故は、1949年から1987年に起きた死者100人を越す事故で、計2023人の命が失われた。当時の国鉄総裁・十河氏は、責任をとって辞職したが、近年2005年に起きた死者100人を越えたJR福知山線事故では、社長は辞めなかった。そればかりか、遺族たちから新規の刑事罰導入の検討要求が出されている。事業所が起こした事故による経済的損失は、6項目を提示したが、実は割があわないほどの経済的損失の内容を含んでいる。

労働災害の特徴は、型別解析からは、身体移動に関する労災が半数以上をこえて無視出来ないタイプの事故となっている。そのうちの転倒事故は逆に増加傾向すら観察できる。このような状況下にあっても、身体移動を余儀なくされる立位作業化がすすんできている。縫製現場においては、意味なく立ちミシンへ移行させた考え方は、今一度考え直すべきではないのだろうか。

年齢階級別労災死亡構造は、わが国の全産業による集計からは、若手と中高年労働者に発生のヤマが見られる。しかしながら、業種業態解析による陸上貨物運送業のそれとは真反対の関係が観察された。ここにおいては、何か特異な状況が陸上貨物運送業に見られると考えてよい。加えて、事業所規模による特徴は、100人未満の就労者で構成される中小零細事業所において全労働災害の約8割が発生している事実がある。

労働災害認定された災害内容について、事故系とメンタル系の比較をしてみよう。2018年度の労働事故死亡者数は906人いた。そして同年度のメンタル系労災死亡者数は76人であった。すなわちメンタル系の約12倍が事故による労災であったことが分かる。労働現場で心理

相談を請け負っている心理臨床家は、事故によって PTSD に陥った労働者からの心理相談を受けることも少なからずあるはずだ。であれば、そのクライアントの向こうがわにある労働実態の事故に対し、もう少し専門家としての理解や配慮があつてのよいのでないだろうか。

最後に、放火と労働ストレスの関係について言及した。現在の全国都市部における出火原因の第1位は、失火ではなく放火に変わってしまった。全国の郵政外務員、すなわち毎日赤バイクや赤色の軽トラックを運転している人々の調査から、ストレスフルに働いている労働者は、交通事故発生の率も高いことが判明した。このような状況下において大切なことは、人としての“寄り添い”が大切であることを示した。1人で持てないほどの大きなこころの荷物も、2人で持つと半分づつに分散でき、十分に持ちこたえることが出来ることを…。加えてストレス対策が、事故防止対策につながることを示した。

2. 情報処理研究から事故防止へ（8月21日(土)）

心理学という学問分野における基礎と応用の構造について説明をした。さらに心理学とその近接学問領域について説明した。そして安全心理学が、とりわけ産業現場で関係する課題に関するキーワードをあげながら説明を試みた。事故・災害の研究方法について説明をし、この領域における実験室における再現性と臨場感について言及した。被験者はこの種の実験において絶対に死なないと考えている。つまり、真のシュミレーションにはならないことを説明した。すなわち、非常にシュミレーション実験がやりづらい領域なのである。したがって、現実起きてしまった事故について、詳細に調べあげることが肝要な作業となる。そして、事故調書が一番多く残っているものが交通事故における警察の事故調書である。死亡・重傷の交通事故385件について、情報処理過程にしたがって調べてみた。すると、認知処理過程における失敗が51.0%、判断処理過程では37.0%、操作処理過程は5.0%であった。すなわち、情報処理過程においては、初段の認知処理過程における失敗が一番多く存在していることが分かった。さらに、眼球運動を捕捉したデータから判明したことは、中心視でとらえる情報が主にとらえられている情報であることも分かった。エラーが起こりにくい機器デザインへのヒントも得られた。同時に、超高齢化する人口構造から、働く人たちの高齢化影響も無視できない。視覚系の認知処理過程を思料した環境整備は、事故防止のうえからも大切になる。水晶体の高齢化影響による、着色影響を考慮しておく必要がある。着色は、最初の黄色から次第に茶褐色へと移行する。加えて、慢性疾患・糖尿病患者の見えも同様である。すなわち、高齢労働者や糖尿病持ち労働者は、このような着色フィルターがかかった世界にいるのである。高齢労働者の労働環境を肌で感じとるため、黄色や褐色のセロファンを購入し、スマホのカメラ・レンズ部分を覆い、写メを撮ることをすすめたい。このプリントされたものが、高齢労働者たちが見ている世界である。加えて聴覚系については、高齢化とともに高い周波数の音が聞こえにくくなる、いわゆるハイカットされてくる。高齢労働者が増えるにしたがって、警告音そのもののあり方についてのヒントになる。コンピュータに入れてあるピープ音系の警告音は、音源としては周波数帯域が高すぎる。一考の必要がある。

視覚系評価の精度については、心理学の知覚研究における錯視系知見が示しているところにも事例が多く存在している。加えて、情報自身に曖昧さが加わると、一層受け取り方が広域に動くことになる。この「あいまい情報処理過程」の説明から、①自動補完、②注意・構え・願望、③性格特性の3つに集約出来ることが示された。このあいまい情報処理過程の説明から、つまるところ環境整備と安全教育に2大別してアプローチしてゆくことになる。労働環境における環境整備は、「いつものものはいつもの所にある」構図を作りあげることが大切になり、このポイントは過去から経験的に“整理整頓”のキャッチフレーズにまとめられた。しかしながら整理整頓だけでアプローチ出来ない労働環境もある。この場合、あいまい情報処理過程の②注意・構え・願望が機能することになる。例えば、林業労働の場合、各林班が林野の現場におもむくが、事故無く安全に木を切るためには、決められている安全手順にしたがってチェー

ンソーで木を切ることが大切である。朝、現地に到着して、班長からの指示で、伐倒、枝払い、ロープ掛け、ウインチ、盤台作業などに分かれるが、その多くの現場は1人で行う作業である。現地に到着して、ツールボックス・ミーティングをして、各作業現場に分散するが、その直前、ツールボックス・ミーティングの終わりに、「安全に作業を遂行することについて議論して下さい」と課題を投げると、そこから返ってくる答えは、「安全手順通りに作業すること」にまとまる。これを確認してから作業に入ると、その日の作業の伐倒痕調べからは、安全手順で伐倒されている実施率が限りなく100%に近くなる。すなわち短い時間のあいだではあるが、②注意・構え・願望は機能していることが分かる。さらにこの例として、鉄道における指差呼称（指差喚呼）法や、船舶のStandard Call Outという方法、航空機におけるYou have controlなどは、この例に相当する。さらに作業効率化の法則性として、①低発生頻度事象、②注意転導、③完了行動、④反射的動作をあげた。

最後に、「事故防止への研究例」をあげてみた。トンネル内事故の特徴は、脇見はほとんどないが、なぜかその多くは追突事故である。トンネル内照明光源として、わが国の高速道路供用の最初1963年7月から低圧ナトリウム照明が使われてきた。このナトリウム灯は589nmの単色輝線スペクトルである。ヒトはこのような光源下で生活したり労働する経験はなかったが、低圧ナトリウム灯は35wと言う経済性を有していた。当該照明光源下における距離感のとりにくさと高齢化等を、①深径覚計測定、②瞬間露出視、③演色性評価などの実験で確かめた。同様な単色系視覚要素を有する労働現場には、捕鯨の解体作業、検ピン作業、大量生産のショートケーキ製造の苺のトッピング作業、VDT作業のモノクロ表示ほかがある。

3. 労働安全問題のトピックスについて：交通事故防止（8月28日(土)）

労働災害における型別労働災害の発生状況は、身体移動に関するものが最も多く、その中には交通事故も含まれている。死亡に限ってみるなら、この交通事故死亡は、墜落・転落について多くて、第2位を占めている。加えて、労働災害の医療的な事後対応において、健康保険処理も労災保険処理も、その医療的対応の内容に差はない。つまり、本当は労働災害であるものが健康保険処理で済まされてしまうと、労働災害件数としてカウントされない点に注意しておく必要がある。

さて、年齢階級別の労災死亡構造は、若年者と中高齢者において高くなり、中年クラスで最低となる傾向が古くからみられてきた。言葉をかえると、①ビギナーとしての不慣れからくるものと、②加齢によるパフォーマンス低下によるものを原因としていると考えられてきた。しかしながら陸上貨物運送業という業種業態においては、この一般的傾向と真反対の関係が観察される。ここにおいては、物流改革の急速な進展、JIT方式の業種を超えた拡大、さらに小口配送の急増加などがあり、その結果の運転手不足影響も無視できないだろう。

移動機械は、道路交通法で規定されているもの以外にも視野を広げて考える必要がある。港湾の広いヤードをうごめいているストラドルキャリアー・トランステナー・ガントリークレーン・大型フォークリフト他や、空港内での移動機械類、鉱山における超大型ダンプカーなどは、道交法適用外の移動機械で、われわれが目にする一般的なナンバープレートはついていない。ここにおける死亡事故は、われわれはほとんど知らない。ストラドルキャリアーについては、死亡事故を知り、全港湾労働組合を介して英国の港湾労働組合と接触して英国サザンプトン港を訪問して、海外における安全対策を調べ、実態の国際比較調査を行った。

トラック輸送の際の事故事例がら浮かび上がる事例の多くは、事故調書からは“前項不注視”に該当するものがほとんどである。しかしながら事故実態を詳細に調べてゆくと、現状から浮かび上がる運転実態は、“眠り運転”の実態が数多くあがってきた。このために、新しい指標として考えた追突指数から、トラック運転における異常に高い追突実態は、トラックの構造を考えても、それをはるかに超えた異常値であると解した。そして眠くなる時刻帯の明け方時刻の事故頻度の高さは、同じ原因だと考えた。

従前の長時間運転中の生体反応研究から指摘されてきたことだが、長時間のハンドル時間下において、観察された反応は、脳波において 10 秒間ほどの睡眠脳波が観察され、その際、同時に、眼球運動と瞬目反応（＝まばたき）の運動・反応を止めていたのである。言葉をかえると、ドライバーは、ごく短い時間、傾眠状態で運転をしていたのである。高速道路で時速 100 キロで走ると 277.8 メートル、120 キロで 333.3 メートルは、まったく無自覚に移動をするのである。

現状のような、夜間、人が起きて活動している 24 都市が時代的先端都市であるような意識は、大きく変えて行く必要がある。①公共サービス、②技術的要請、③経済的理由などによる夜間操業には、ある程度の理由は理解出来る。しかしながら、単に新しくもてはやしたライフスタイル変化へ合わせるために、夜間労働を増やすことは厳に慎むべきである。早朝のコンビニ店頭、焼きたてのパンをならべるために、製パン工場が夜間操業をし、その製品を商品にかえるために JIT 配送をする小口輸送の小型トラックの頻回輸送、もう止めて、夜寝て、昼働く、人間らしいサイクルへもどすべきである。

ここにおいて、道路交通法による安全運転管理者制度の説明を行った。さらに、道路運送法と、貨物自動車運送事業法による運行管理者制度について説明を加えた。同時に、運転適性検査についても説明を加えた。

従前の道路交通事故の対策について、その交通事故調書から原因をさぐり、当該対策を実施してゆくことが一般的であった。しかし職業ドライバーが起こす交通事故の場合、必ずしもこの手法が真の原因へ肉薄するとは限らない。現象的原因のみではなく、そのさらに奥に隠れている真の原因へ肉薄することが大切であることをつけ加えておきたい。

4. 現状の安全問題と対策：非正規労働における問題点（9月11日(土)）

非正規労働者は、正規雇用契約以外の有期雇用労働のことで、雇用主には税・社会保障負担の義務が発生しない労働者のことである。第一・二・三次の産業区分では、第三次産業の就業者割合が 7 割をこえる状況にあり、さらに第一・二次産業における女性割合にくらべると、第三次産業における女性割合は格段に高い。加えて、第三次産業におけるパートタイム労働者割合が、近年一層の伸びを示めした。非正規労働者の増加は、いまや労働者の 3 人に 1 人が非正規労働者で、その非正規労働者の 70 %が女性で占められている。非正規雇用者の収入を 1 日 8 時間労働で計算すると、年収 185 万円になり、子育てはおろか老親の世話もままならない。加えて、労働人口不足から、定年制は延長をづづけ、われわれは死ぬまで働くことになる。現に、65 歳以上高齢者の就業率は世界 1 位の 20 %を越え、この貧しい生活状況下、国民総中流は過去のこととなった。ワーキングプアの急速拡大が出現し、母子家庭の餓死事件が頻発をしている。ジニ係数からは、わが国の場合は 0.5536（2011 年）となり、今や慢性的暴動が起きても不思議でない状況にある。

非正規シングル女性がおかれている状況や、非正規雇用の母子家庭がおかれている状況は、一層きびしい。ここにおける問題点は、女性が大人になってゆく標準モデルから乖離しており、法的サポート範囲からこぼれてしまっていた点にある。パラサイトシングルからの 8050 問題。ここは、男女格差問題を内包しながら、さまざまな男女格差が観察される。家族のかたちも変貌しはじめ、単独世帯が占める割合が世帯類型で一番多い世帯になりつつある。

正規雇用と非正規雇用の収入乖離現象は、事業所における利益を平準分配しておらず、富の偏在現象として現れた。企業の現預金は過去最高額になっているが、労働者へは分配していない。いわゆる会社が太り、個人が細っている。しかし会社経営者も個人として細っているのではない。日産のゴーンしかりであった。また、税制における累進課税制度が弱まって、消費税導入による一律の課税方式が強まった。そして労働力の調節弁としての役割を担うことになった。

パート・アルバイト労働の事例を集める作業を行った。本作業を進めるうちに、大学生バイ

トの過労死が 2002 年に起きた。過酷なディズニーランドにおける着ぐるみショー問題から、ついに枚方パークでも死者が 2019 年にでた。

非正規労働における問題は、①“習熟”の問題、②“安全”の問題、③人間関係の“しぼり”問題、④“夜間労働”問題、⑤“法的基準と規制”問題、⑥“情報誌”問題、⑦“時間外労働”問題、⑧“意見反映が無い”問題、などを含んでいた。安全のための安全教育や研修は重要な取組である。しかしその安全教育・研修は、非正規労働者へ向けてはほとんど存在していない。

働く意味を再考する

—みずほ銀行のシステム障害噴出を機に・・・—

三戸 秀樹

西洋における転職状況が伝えられて、バブル崩壊以降はとくに、生涯同じ事業所に勤める終身雇用があたかも古いことのように喧伝された。さらに、生涯同じ事業所で勤務するのではなく、転職しながら“自分探し”をすることこそが、重要であるかのごとく語られた。しかし、本当にそうだったのだろうか。そして自分探しが果たせたのだろうか。昔も尻の先のとがった人は沢山いた。それらの人々の多くが、自分探しを果たしたかどうか調べると分かるのではないだろうか。イタリアの最新データからは、生涯同じ事業所で勤務を続ける人は、日本の現状より多いのだ。

“主人公化”の社会的流れのなかで、近年「自分探し」に疲れ、コロナ禍も影響して、新たな転職時の観点は「社会のなかで自分がどんな役割をもてるかを、模索する」へ変化していることは確かである。そこにおける仕事の有様は、頼まれなくても丁寧におこなう仕事、周囲には馬鹿に見えるほどの試行錯誤をいとわない仕事の実態、このような労働細部の日常を観察することが可能だ。ここにおいては、柳宗悦たちが評価した民芸のなかに見た職人たちの仕事振りが重なる（注：本会報 Vol.2(4)の「民芸と社会福祉—共通する視点—」参照のこと）。またコロナ禍影響で、都会から鄙に異動し、農業労働や漁業労働や林業労働に勤しむ人たちからも同様な労働におけるところの傾斜を観察出来る。そして最近、筆者は家内の車の板金修理の折に、このような優れた仕事をする作業者に会い、とても豊かな気持ちになることが出来た。日本の労働現場もまだ捨てたものではない。そこには、この程度でよいだろうとする仕事ではなく、作業者が恐らく仕事の依頼者の満足よりも、自身の仕事の出来上りに満足したくて仕事をしている感を強く感じることが出来る。“主人公化”の社会的流れのなか、本当の「自分探し」は、一人ひとりの働く人が働く意味をみつめなおし、誇れる仕事を創りだそうとすることにある。そして、自分が納得して生きることの大切さが同時に存在している。

みずほ銀行におけるシステム障害から出てきた近年の迷惑な問題、その現場には上記のような情報系技術者の気概を感じることが出来ないし、銀行管理職からも同様に感じる事が出来ない。この現代労働現場に、かつての日常雑器を作った職人たちにみられた気概がなくなってしまったのか。しかし現場の技術者においては、おそらく心ある技術者たちは心底、ここを痛めているはずだ。社会は、無数のよき仕事に囲まれてなり立っているのだから。

閑話休題：トラウマ経験と解消

— Hall of Science と Challie McCathy のスプーン —

三戸 秀樹

父が大阪大学・理学部教授をしていた時、米国留学の出来るフルブライト奨学金を使ってハーバード大学へ2年間留学した。正確には、フルブライト奨学金制度の前身にガリオアという制度が2年間存在していて、その2回目に応募をして留学した。父が米国へ赴いた時、私はちょうど小学1年生だったと思う。ということは、留学期間は1951年から1953年頃だったの

ではないかと思う。留学そのものは原則1年間のようだったが、父はさらにプラス1年間の留学延長を希望した。

その留学から持ち帰った中型スプーンが2種計3本ある。いずれも銀メッキのスプーンで、最近では、はかかなり剥げています。その一つは、Hall of Science(Chicago)のスプーンだ。このスプーンには、A CENTURY of PROGRESS、1933、Rostrum、ONEIDA COMMUNITYと、書いてある。この同じスプーンは2014年の渡米時にケンタッキー州のアンティーク・ショップで見つけた。その際には購入しなかったが、翌2015年9月の渡米の折にイリノイ州で9本買った。そしてもう一つの種類のスプーンが、Challie McCathy(チャーリー・マッカーシー)のスプーンだった。チャーリー・マッカーシーとは、当時の有名な腹話術師エドガー・バーゲン(1903年～)の腹話術人形の名前だった。

父は大学生の頃から英語が得意で、オープンハイマー博士が大阪大学・理学部へ来たとき、理学生の学生でありながら通訳をしていた。戦後、マンハッタン計画で有名になったオープンハイマーを新聞社が招待し講演会を開催した時も、講演会場で父が通訳をした。アポロが宇宙へ飛んだ時、テレビ実況中継で英語-日本の同時通訳が一般に知られるようになった。その後、インター大阪と言う同時通訳会社が大阪で設立されたが、父はその設立にもかかわっていたと記憶している。

自宅での朝食時、父は子どもたち4人に英単語を覚えさせるため、全員に英単語を幾度も発音させ、その発音を直して再度発音させた。この英単語教室の題材に、このスプーンが取り上げられた。すなわち、小学生低学年で腹話術 ventriloquist という英単語を覚えさせられた。「ベン」までは発音しやすいのだが、そのあとの発音が随分難しかったことを記憶している。せっかくの父を交えた休日の朝食が不味くて、しばしば発音することを拒否し、父に激しく殴られた。この発音ストライキの最後は、高校生の時だ。いくら父が言っても私だけが発音しないので、兄弟姉妹(姉2人、弟1人)たちは食卓から一抜け二抜けして居なくなり、最後は父と私だけの食卓になって、最後にぶん殴られて吹っ飛びました。自分が家庭を持った時、こんな英会話教室みたいな食卓は絶対しないぞっ…と肝に銘じました。

このスプーンは、2015年9月にアンティーク・ショップで2本を買い足した。当時は知るよしもないのだが、エドガー・バーゲンの娘は女優のキャンディス・バーゲン(1946年～)で、彼女は、映画「パリのめぐり逢い」でイブ・モンタンと共演した著名な女優さんでした。以前は、このスプーンを使うと食事が不味くなるが、いまでは買い足しをしたほどという事は、完全に乗り越えたということである。

ニュース

- 2022年度からの新理事として、大阪教育大学・名誉教授の高橋誠先生をお迎えすることになりました。先生は、長らく(財)労働科学研究所の研究員をされておられ、労働系心理学の研究歴が長い方です。労働現場は、随分幅広く関わらってこられ、人間工学に関する造詣も深い研究者です。大阪教育大学時代には、付属学校の校長歴もつとめられました。
- 神戸新聞「随想」へ、代表理事・三戸による連載がはじまりました。5月から8月までのあいだに8回掲載されます。初回5月12日は、「産業社会福祉士の創設」について、第2回5月27日は、「肢体不自由児サービスグループ」でした。

事務局だより

- 新学期開始の早くから、学部実習がスタートしました。学部実習は昨年度から、すでに一部の大学ではじまっています。各大学の御希望に添うよう、相談を致しながらタタキ台のプランを作成し、より良いものへと昇華しながら進めています。

- MHC のホームページ（www.mental-health-center.jp）を開く際に、右の QR コードを活用下さい。



編集後記

- 2022年度会報 Vol.3 巻1号のはじまりになりました。
- 「労働心理学のあれこれ」「産業安全のこぼなし」「相談員だより」等は、今回お休みです。
(編集子)